

氏 名	さ とう けい いち 佐 藤 圭 一
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 2260 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	工 学 研 究 科 生 活 空 間 学 専 攻
学位論文題目	ケープタウン（南アフリカ）における居住空間の形成・変容過程とその再編計画に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 高 橋 康 夫 教 授 小 林 正 美 助教授 布 野 修 司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、南アフリカ・ケープタウンの都市空間を対象として、そのポスト・アパルトヘイト期の居住空間再編を視野に入れ、17世紀の植民都市としての形成段階からアパルトヘイト体制へ、そして現在に至るまでの変容過程と居住地区の特性を現地調査に基づく考察によって明らかにすることを目的としたものであり、序章とそれに続く本論5章、及び結章からなる。

序章では、既往の研究を整理し、本論文の目的・背景・視点について述べている。

第1章では、セグリゲーションに着目して、1652年のJ. v. リーベックの到来から独立（1910年）に至るまでの植民地期におけるケープタウンの都市形成過程を主として古地図に拠りながら考察し、19世紀の鉄道の敷設に伴い富裕層が郊外に住み始めるとともに、低所得者層が都心部に流入したことが要因となってボーカープ地区やディストリクト・シックス地区といった非白人居住地区が都心部に形成されたことを明らかにしている。

第2章では、独立後（1910年）における人種隔離政策の根幹を成した法律の成立背景とケープタウンの都市空間構成の変容過程との関連を考察し、多人種が混住するケープタウンでは全人種に対するセグリゲーションが徹底されたのは、集団地域法制定（1950年）以降であることを明らかにしている。また、「理想」のセグリゲーション・システムとしてR. J. Daviesが提示する2つの都市形態モデルについてその相違を考察し、アパルトヘイトの都市計画理念を各人種毎の居住地区を分離、純化し、最低限に統合することと明確化している。

第3章では、1935年の航空写真と1982/3年の調査結果を用いてアパルトヘイト前後のボーカープ地区の変容を分析し、地区が拡大している一方で既存の街区形態には変化がないことを明らかにしている。次に、臨地調査による施設分布、住居類型の現況分析を行い、ボーカープ地区に商業施設・オフィス等が浸食している状況や住居の増築、集合住宅の建設等、1982/3年の調査以降の変化が著しいことを明らかにし、アパルトヘイト体制下ではムスリム居住地区として隔離されていたが、都心部に立地する地区の有効性から今後の開発の焦点となることを指摘している。また、18世紀の様式のストゥープと呼ばれるベランダやコートヤードを持つボーカープの住居プランの分析を通じて、A, B, C, Dの4タイプに類型化し、C, DタイプがA, Bタイプの組み合わせで構成され、Aタイプの原型からBタイプ、C・Dタイプへとプランが複雑になったことを明らかにしている。

第4章では、18世紀以降のディストリクト・シックス地区の形成とアパルトヘイト体制下における解体の過程をケープタウンの発展に関連づけて明らかにしている。また、ケープタウン市による1964年の土地利用調査図を用いてクリアランス直前の街区構成を復元し、過密、狭小な居住環境や衛生状態の問題はあったが、多人種混住のコミュニティが存在し、街路を共用空間として用いる等極めて活気ある空間であったことを明らかにしている。

同じく都心部周縁にある非白人居住区にも関わらずクリアランスを免れたボーカープ地区がムスリムを中心とした比較的均質な地区であったのとは対照的に、ディストリクト・シックス地区は多人種の混住する地区であり、分離、純化し、最低

限に統合するというアパルトヘイトの都市計画理念から大きく逸脱していたことが激しいクリアランスを被った大きな要因であることを明らかにしている。

第5章では、田園都市運動の世界史的展開とアパルトヘイト政策との関連について、ケープタウンに建設されたパインランズ地区と各地の植民都市で活動した都市計画家の動向に即して考察し、アパルトヘイトの文脈においては田園都市計画思想が20世紀初頭のセグリゲーションの深化と平行して南アフリカに受け容れられ、人種隔離の手段となってパインランズ地区が実現した過程を明らかにしている。また、J.ペリーによる計画案とA.J.トンプソンによる計画案及び現況の比較考察を通じて、A.J.トンプソンの計画ではR.アンウィンの計画手法である共用空間が徹底されていないこと、また開発から半世紀以上敷地割りに変化が無く住宅地管理が有効に行われていたことを明らかにしている。

結章では以上の分析・考察を通じて、ケープタウンの形成・変容過程、居住地区の特性についてまとめ、セグリゲーションとゾーニングの密接な関係の問題点を指摘することにより、ポスト・アパルトヘイト期の居住空間再編に対する知見を提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、南アフリカ・ケープタウンの都市空間を対象として、ポスト・アパルトヘイト期の居住空間再編を視野に入れ、17世紀の植民都市としての形成段階からアパルトヘイト体制へ、そして現在に至るまでの変容過程と居住地区の特性を現地調査に基づく考察によって明らかにすることを目的としたものであり、得られた主な成果は以下の通りである。

- (1) ケープタウンの都市空間においては、全人種を対象としたセグリゲーションは集団地域法制定（1950年）以降であり、その手法としてゾーニングが用いられたことを明らかにしている。
- (2) ボーカープ地区はアパルトヘイト期を通じて既存の街区形態に変化がない一方で、1980年代以降に商業施設や集合住宅が建てられている状況を明らかにし、これまでムスリム居住地区として隔離されていたが、都心部に立地する地区の有効性から今後は開発の焦点となることを指摘している。また、地区に残るストゥープやコートヤードをもつ住居を4タイプに類型し、Aタイプの原型からBタイプ、C・Dタイプへとプランが複雑になったことを明らかにしている。
- (3) デイストリクト・シックス地区は、多人種が混住し、各人種毎に居住地区を分離、純化し、最低限に統合するというアパルトヘイトの都市計画理念から大きく逸脱していた。このことが、アパルトヘイト体制下のクリアランスを免れたボーカープ地区とは対照的に、激しいクリアランスを被った要因であることを明らかにしている。
- (4) パインランズ地区は田園都市運動の直接の影響を受けて建設されたが、20世紀初頭のアパルトヘイト体制へ向かう南アフリカでは、それはセグリゲーションの深化と平行して受け容れられ、人種隔離の手段となったことを明らかにしている。

以上、要するに、本論文は、具体的地区に即してケープタウンの居住空間の形成・変容過程とその特性を明らかにし、セグリゲーションとゾーニングの密接な関係の問題点を指摘することにより、ポスト・アパルトヘイト期の居住空間再編に対する知見を提示したものであり、得られた成果は、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年2月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。